

読書感想文の書き方

★校内読書感想文コンクール要項★

課題図書は、夏休み前に提示します

- ・A4サイズの原稿用紙に、縦書きで自筆してください。(PC使用不可)
- ・字数は、2000字以内。(1800字以上書くことがのぞましい) <原稿用紙5枚以内>
- ・原稿用紙を開けた状態で、右上に一ヵ所、ホッチキスで止める。
- ・提出作品について、オリジナルのものに限る。(盗作したものは不正である)

インターネットのサイトに載っている作品をそのまま写して提出するのはダメ!

「著作権フリー」として掲載されているようなものもありますが、「オリジナル」作品でないので、学校の宿題やその他コンクールに出品しても認められません。

・提出期限: 夏休み明けの最初の国語・現代文の時間

* 敬重な審査の結果、優秀作品については、11月の読書週間で全校表彰し、感想文集『椋の木』に収め配布します。

<読書感想文の書き方>

1. 本を選ぼう

選定課題図書か国語科推薦図書150冊の中から1冊選んでください。

2. 読書メモを作ろう

共感したところ、気になったフレーズに付箋紙を貼ったり、

読書中に思ったことをメモしたりしておこう。

3. 構成を考えて書こう

1. タイトル

「〇〇を読んで」などの題名でもよいですが、「〇〇が教えてくれたこと」など、ひと工夫してみましょう。

2. なぜその本を読もうと決めたのか?(約200文字)

書き出しとして、その本を読むきっかけを書くのもよいでしょう。

3. 本のあらすじ(約200文字)

詳しく書かないことがポイントです。「いつ、どこで、だれが、どうした」を簡潔に書きます。

4. 印象に残った点、感銘を受けた箇所の紹介(約500文字)

読書メモを参考に書き進めていきます。

5. 印象に残った点についての感想や意見を書く(約600文字)

根拠を明示すること、読書前・後や日本と海外など比較を取り入れると、わかりやすくまとめられます。

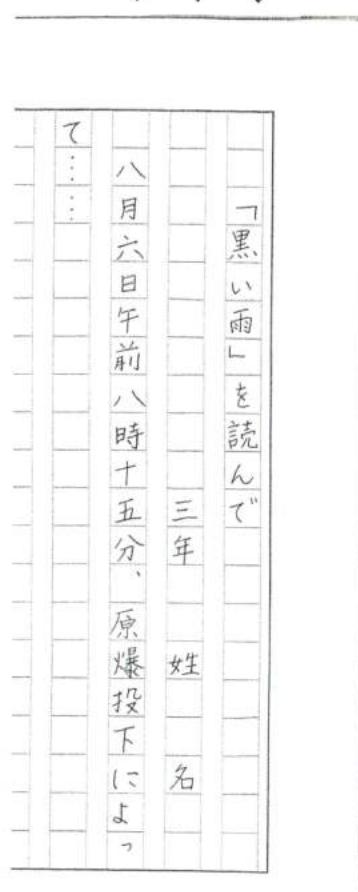
6. 読書後にどのような心の成長をしたのか、今後に活かせることをまとめる(約500文字)

まとめ(約500文字)

その本を読んで自分がどのように変化したのか、これから的生活にその本を読んだ経験をどう生かすのか、といったことを書きます。

4. 書いたものは必ず読み直そう

- 主語・述語の関係。テニヲハ・接続詞はおかしくないか
- 話題が変わるとときに段落を作っているか
- 誤字脱字はないか
- 自分の伝えたいことが説得力をもって読み手に伝わるか



写実主義

明治10年代後半、文学を見直し、教訓や政治などの手段として考えず、文学自体がから独立して目的を持つものとする意識が生まれた。二葉亭四迷によって文学が言文一致で書かれたことは意義深く、近代日本文学の出発点といえる。

代表的作家: 坪内逍遙・二葉亭四迷

1. 坪内逍遙『小説神髄』(岩波文庫)

「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」小説を書くために、まず小説とは何かを知らなければならなかった時代。江戸戯作に親しみ西洋文学を涉獵した若き文学士逍遙(1859-1935)が明治の世に問うた、日本近代文学史の黎明に名を刻む最初の体系的文学論。

2. 二葉亭四迷『浮雲』(新潮文庫)

秀才ではあるが世故にうとい青年官吏内海文三の内面の苦悩を精密に描写して、わが国の知識階級をはじめて人間として造形した『浮雲』は、当時の文壇をはるかに越え、日本近代小説の先駆とされる作品。

擬古典主義

行き過ぎた西洋化の反動として、明治20年代には、保守的な思想が復活した。

代表的作家: 尾崎紅葉・幸田露伴(紅露時代)

3. 樋口一葉『にごりえ・たけくらべ』(新潮文庫)

酌婦の身を嘆きつつ日を送る菊の井のお力のはかない生涯を描いた「にごりえ」。東京の下町を舞台に、思春期の少年少女の姿を描く「たけくらべ」。

5. 尾崎紅葉『金色夜叉』(新潮文庫)

許嫁・宮に裏切られた貫一は、冷徹な高利貸となり復讐を誓う。熱海海岸の別れや、二人の恋の意外な顛末とは…。

ロマン主義

西欧思想の影響を受けて、封建制から解放された自由な精神、近代的自我を求めたもの。

代表的作家: 初期の森鷗外・与謝野晶子・泉鏡花・徳富蘆花・国木田独歩

7. 泉鏡花『高野聖』(集英社文庫)

魔と夢が交錯するエロスと幻想の世界! 飛蟻から信州へ、時をたどる旅の僧が、美しい女の住む山中の一軒家で一夜の宿を乞う。その夜…。表題作他5編収録。

9. 国木田独歩『武蔵野』(新潮文庫)

詩情に満ちた自然観察で武蔵野の林間の美をあまねく知らしめた不朽の名作「武蔵野」。

自然主義

日露戦争前後、社会の矛盾が深刻化し、文学もフランスの自然主義の影響を受け、現実と人間があるがままに描く文学態度を唱えた。

代表的作家: 田山花袋・島崎藤村

11. 田山花袋『蒲団・重右衛門の最後』(新潮文庫)

蒲団に残るあとの人の匂いが恋しい——赤裸々な内面を大胆に告白して自然主義文学の先駆をなした「蒲団」に「重右衛門の最後」を併録。



12. 田山花袋『田舎教師』(新潮文庫)

文学への野心に燃えながらも、田舎の教師のままで短い生涯を終えた青年の出世主義とその挫折を描いた、自然主義文学の代表的作品。

反自然主義・高踏派・余裕派

自然主義に対し、独自の文学性を追究した派が生まれた。

代表的作家: 夏目漱石・森鷗外

13. 夏目漱石『吾輩は猫である』(集英社文庫)

「吾輩は猫である。名前はまだない。」苦沙弥先生の家に拾われた猫の「吾輩」から見れば、人間社会はこっけいそのもの。無名猫の視点から、軽妙洒脱な文体にのせて放たれる文明批評と深いウェットは時代を超えて読者の心をつかんできた。見識とシャレ気あふれる漱石の永遠のエンターテインメント文学。



15. 夏目漱石『三四郎』(新潮文庫)

熊本の高等学校を卒業して、東京の大学に入学した小川三四郎は、見る物聞く物の総てが目新しい世界の中で、自由気な都会の女性里見美櫻子に出会い、彼女に強く惹かれてゆく。青春の一時期において誰もが経験する、学問、友情、恋愛への不安や戸惑いを、三四郎の恋愛から失恋に至る過程の中に描いて「それから」「門」に続く三部作の序曲をなす作品である。



16. 夏目漱石『それから』(新潮文庫)

長井代助は三十にもなって定職も持たず、父からの援助で毎日をぶらぶらと暮している。実生活に根を持たない思索家の代助は、かつて愛しながらも義侠心から友人平岡に譲った平岡の三千代との再会により、妙な運命に巻き込まれていく……。破局を予想しながらもそれゆくべきではない愛を通じて「それから」の悲劇を描く、「三四郎」に続く三部作の第二作。



17. 夏目漱石『門』(新潮文庫)

親友の安井を裏切り、その妻であった御米と結ばれた宗助は、その負い目から、父の遺産相続を叔父の意にまかせ、今また、叔父の死により、弟・小六の学費を打ち切られても積極的解決に乗り出さることもなく、社会の罪人として諦めのなかに暮らしている。そんな彼が、思いがけず耳にした安井の消息に心を乱し、救いを求めて禅寺の門をくぐるのだ。『三四郎』『それから』に続く三部作。



19. 夏目漱石『文鳥・夢十夜』(新潮文庫)

人に勤められて飼い始めた可憐な文鳥が家人のちよつとした不注意からあっけなく死んでしまうまでの出来事を淡々とした筆致で描き、著者の孤独な心持をにじませた名作『文鳥』、意識の内部に深くわだかまる恐怖・不安・虚無などの感情を正面から凝視し、『裏切られた期待』(人間の意志の無力感)を無気味な雰囲気を漂わせつつ描き出した『夢十夜』ほか、「思い出す事など」『永日小品』等全7編。



21. 森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』(新潮文庫)

人買いのために引離された母と姉弟の受難を通して、犠牲の意味を問う『山椒大夫』、弟殺しの罪で島流しにされてゆく男とそれを護送する同心との会話から安樂死の問題をみつめた『高瀬舟』。



23. 森鷗外『渋江抽斎』(岩波文庫)

渋江抽斎(1805-58)は弘前の医官で考証学者であった。「武鑑」収集の途上で抽斎の名に遭遇し、心を惹かれた鷗外は、その事跡から交友関係、趣味、性格、家庭生活、子孫、親戚にいたるまでを克明に調べ、生きいきと描きだす。抽斎への熱い想いを淡々と記す鷗外の文章は見事というはない。鷗外史伝ものの代表作。



25. 森鷗外『ヰタ・セクスアリス』(新潮文庫)

哲学講師の金井湛君は、かねがね何か人の書かない事を書こうと思っていたが、ある日自分の性欲の歴史を書いてみようと思つた。六歳の時に見た絵草紙の話に始り、寄宿舎で上級生を避け、窓の外へ逃げた話、硬派の古賀、美男の尼島と結んだ三角同盟から、はじめて吉原に行った事まで科学的な冷靜さで淡々と描かれた自伝体小説であり掲載誌スバルは発禁となって世論をわかせた。

大正の文学

耽美派

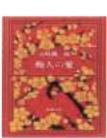
西洋の世紀末思潮の刺激を受け、官能享楽主義、耽美主義を標榜した。

代表的作家：永井荷風・谷崎潤一郎



26. 永井荷風『ふらんす物語』(岩波文庫)

「現実に見たフランスは、見る以前のフランスよりも、更に美しく、実に優しかった。」明治40年7月、27歳の荷風は4年間のアメリカ滞在の後、憧れの地フランスに渡った。彼が生涯愛したフランスでの恋、夢、そして日本への絶望—日本近代文学屈指の青春文学。



28. 谷崎潤一郎『痴人の愛』(新潮文庫)

きまじめなサラリーマンの河合議治は、カフェでみそめて育てあげた美少女ナオミを妻にした。河合が独占していたナオミの周辺に、いつしか不良学生たちが群がる。成熟するにつれて妖艶さを増すナオミの肉体に河合は悩まされ、ついには愛欲地獄の底へと落ちていく。性的倫理も恥じらいもない大胆な小悪魔が、生きるために身につけた超ショッキングなエロチズムの世界。



自然主義とも耽美派とも違う理想主義的な人道主義の立場を取り、それぞれの個性や自我を尊重した。

代表的作家：武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉



29. 武者小路実篤『お目出たき人』(新潮文庫)

自分は女に、餓えている。この餓えを自分は、ある美しい娘が十二分に憐してくれるのも、信じて疑わない。実はいまだに口をきいたことすらなく、この一年近くは姿を目にしてもいない、いや、だからこそますます理想の女に近づいてゆく、あの娘が……。あまりに热烈で一方的な片恋。その当然すぎる破局まで、豊かな失恋能力の持ち主・武者小路実篤が、底ぬけの率直さで描く。



31. 武者小路実篤『友情』(岩波文庫)

主人公野島とその親友大宮における友情と恋愛の相剋—青春のあらゆる問題がこのテーマを中心に展開される、武者小路実篤の数多い作品の中でも、とりわけ多くの若い読者に愛読されてきた永遠の青春小説。



33. 志賀直哉『和解』(新潮文庫)

主人公順吉は父の京都來遊に面会を拒絶し、長女の誕生とその死をめぐって父の处置を憎んだ。しかし、次女に祖母の名をかりて命名したところから、父への気持も少しずつほぐれ、義母や義母の不断の好意も身にしみ、ついに父と決和し和解をとげた……。肉親関係からくる免れがない複雑な感情の葛藤に、人間性に徹する洞察力をもって対処し、簡勁端的な手法によって描写した傑作中編。



18. 夏目漱石『草枕』(新潮文庫)

智に働き角が立つ——思索にかられつつ山路を登りつめた青年画家の前に現われる謎の美女。絢爛たる文章で綴る漱石初期の名作。



20. 森鷗外『阿部一族・舞姫』(新潮文庫)

許されぬ殉死に端を発する阿部一族の悲劇を通して、高揚した人間精神の軌跡をたどり、権威と秩序への反抗と自己救済を主題とする歴史小説の逸品『阿部一族』。ドイツ留学中に知り合った女性への恋情をふりきって官途を選んだ主人公を描いた自伝的色彩の強いロマン『舞姫』ほか。



22. 森鷗外『雁』(新潮文庫)

極めて市井的な一女性の自我の目ざめとその挫折を岡田の友人である「僕」の回想形式をとり、一種のくすんだ哀愁味の中に描く名作である。



24. 森鷗外『青年』(新潮文庫)

作家を志して上京した青年小泉純一は、有名な作家を訪ねたり、医科大学生太村に啓発されたりして日々を過す一方、劇場で知りあつた謎の目をもつ坂井未亡人と交渉を重ねる。しかし、夫人を追ってきた箱根で、夫人が美しい肉の塊にすぎないと感じた時純一は、今こそ何か書けそうな気がしてくるのだった。——青春の事件を通して、一人の青年の内面の成長過程を追求した長編。



41. 芥川龍之介『蜘蛛の糸・杜子春』(新潮文庫)

地獄に落ちた男が、やっとのことでつかんだ一条の救いの糸。ところが自分で助かりたいというエゴイズムのために、またもや地獄に落ちる「蜘蛛の糸」。大金持ちになることに愛情がつき、平凡な人間として自然のなかで生きる幸福をみつけた「杜子春」。魔法使いが神の裁きを受ける神秘的な「アグニの神」。少年少女のために書かれた、健康で明るく、人間性豊かな作品集。



37. 芥川龍之介『蜘蛛の糸・杜子春』(新潮文庫)

地獄に落ちた男が、やっとのことでつかんだ一条の救いの糸。ところが自分で助かりたいというエゴイズムのために、またもや地獄に落ちる「蜘蛛の糸」。大金持ちになることに愛情がつき、平凡な人間として自然のなかで生きる幸福をみつけた「杜子春」。魔法使いが神の裁きを受ける神秘的な「アグニの神」。少年少女のために書かれた、健康で明るく、人間性豊かな作品集。



27. 谷崎潤一郎『春琴抄』(新潮文庫)

盲目的三昧線師春琴に仕える佐助の愛と献身を描いて谷崎文学の頂点をなす作品。幼い頃から春琴に付添い、彼女にとってなくてはならぬ人間になっていた奉公人の佐助は、後年春琴がその美貌を何者かによって傷つけられるや、彼女の面影を脳裡に永遠に保有するため自ら盲目の世界に入る。単なる被虐趣味をつきぬけて、思考と官能が融合した美の陶酔の世界をくりひろげる。



43. 芥川龍之介『轟の中』(講談社文庫)

わたしが搦め取った男でございますか？これは確かに多襄丸と云う、名高い盗人でございます——。馬の通う路から隔たつた數の、胸もとを刺された男の死骸が見つかった。殺したのは誰なのか。今も物語の真相が議論され続ける「轟の中」他、「羅生門」「地獄変」「蜘蛛の糸」など、芥川の名作、6編を収録。



45. 佐藤春夫『田園の憂鬱』(新潮文庫)

都会の喧嘩から逃れ、草深い武蔵野に移り住んだ青年を絶間なく襲う幻覚、予感、焦躁、模索……青春と芸術の危機を語った不朽の名作。



46. 中島敦『李陵・弟子・名人伝』(角川文庫)

豊富な漢詩文の教養と鋭い人間觀察をもって描き、作者の名を不朽のものにした代表作六編を参考資料とともに収録。李陵・蘇武・司馬遷の運命を描く【李陵】他。



47. 小林多喜二『蟹工船・党生活者』(新潮文庫)

海軍の保護のもとオホーツク海で操業する蟹工船は、乗員たちに過酷な労働を強いて暴利を貪っていた。『国策』の名によってすべての人権を剥奪された未組織労働者のストライキを扱い、帝国主義日本の一断面を抉る「蟹工船」。近代的軍需工場の計画的な争議を、地下生活者としての体験を通して描いた「党生活者」。29歳の若さで虐殺された著者の、日本プロレタリア文学を代表する名作2編。



48. 横光利一『機械・春は馬車に乗って』(新潮文庫)

ネームプレート工場の四人の男の心理が馬車のように絡み合いつつ、一つの詩的宇宙を形成する「機械」等、新感覺派の旗手の傑作集。



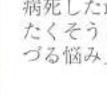
50. 川端康成『雪国』(新潮文庫)

親譲りの財産で、さまざまな生活を送る島村は、雪深い温泉町で芸者駒子と出会い。許婚者の療養費を作るため芸者になったといい、駒子の一途な生き方に惹かれてからも、島村はぬきぎりの愛以上のつながりを持つとうしない——。冷たいほどにすんだ島村の心の鏡に映される駒子の烈しい情熱を、哀しくも美しく描く。ノーベル賞作家の美質が、完全な開花を見せた不朽の名作。



35. 有島武郎『小さきものへ・生まれ出づる悩み』(新潮文庫)

病死した最愛の妻が残した小さき子らに、歴史の未来をたくそうとする慈愛に満ちた「小さき者へ」に「生まれ出づる悩み」を併録する。



人間の実態を距離を置いて見つめ、人間の醜悪さや卑しさを理知の目をもって、鋭く捉え問題を提示して、代表的作家：芥川龍之介・菊池寛



36. 有島武郎『或る女』(新潮文庫)

美貌で才氣溢れる早月葉子は、従軍記者として名をはせた詩人・木部と恋愛結婚するが、2カ月で離婚。その後、婚約者・木村の待つアメリカへと渡る船中で、事務長・倉地のたくましい魅力の虜となり、そのまま帰国してしまう。個性を押圧する社會道徳に反抗する、不羈奔放に生きようとして、むなしく敗れた一人の女性の激情と運命を描きつくした、アーティズム文学の最高傑作のひとつ。

38. 芥川龍之介『河童・或ア呆の一生』(新潮文庫)

芥川最晩年の諸作は死を覺悟し、予感しつ書かれた病的な精神の風景画であり、芸術的完成への欲求と人を戦慄させる鬼気が漲っている。出産、恋愛、芸術、宗教など、自らの最も痛切な問題を珍しく饒舌に語る「河童」、自己の生涯の事件と心情を印象的に綴る「或ア呆の一生」、人生の暗澹さを描いて憂鬱な気魄に満ちた「玄山房」、激しい強迫観念と神経の戦慄に満ちた「幽車」など6編。

40. 芥川龍之介『地獄變・偽盜』(新潮文庫)

「王朝もの」の第二集。芸術と道徳の相剋・矛盾という芥川のもつとも切実な問題を、「宇治拾遺物語」中の絵師良秀をモデルに追及し、古今欄にも似た典雅な色彩と線、迫力ある筆で描いた「地獄變」は、芥川の一大代表作である。ほかに、羅生門に群がる盜賊の凄惨な世界に愛のさまざまな姿を浮彫りにした「偽盜」、斬新な構想で作者の懷疑的な人生觀を語る「數の中」など6編を収録する。

42. 芥川龍之介『奉教人の死』(新潮文庫)

芥川は殉教者の心情や、東西の異質な文化の接触と融和という課題に興味を覚え、近代日本文学に「切支丹物」という新分野を開拓した。文祿・慶長ごろの語文體にならったスタイルで、若く美しく信仰篤い切支丹奉教人の、哀しいが感動的な終焉を格調高く綴った名作「奉教人の死」、信仰と封建的な道徳心との相剋に悩み、身近な人情に從つて生きた女を描く「おさん」など、11編を収録。

44. 菊池寛『藤十郎の恋・恩讐の彼方に』(新潮文庫)

元禄期の名優坂田藤十郎の偽りの恋を描いた「藤十郎の恋」、耶馬溪にまつわる伝説を素材に、仇討ちその非人間性のゆえに否定した「恩讐の彼方に」ほか「忠直卿行状記」「入札」「俊化」など、初期の作品中、歴史物の佳作10編を収める。著者は創作によって封建性の打破に努めたが、博覧多読の收穫である題材の広さと異色あるテーマはその作風の大きな特色をなしている。

46. 中島敦『李陵・弟子・名人伝』(角川文庫)

豊富な漢詩文の教養と鋭い人間觀察をもって描き、作者の名を不朽のものにした代表作六編を参考資料とともに収録。李陵・蘇武・司馬遷の運命を描く【李陵】他。

昭和前期の文学

社会運動の高まりを背景に、個人主義的な文学を否定したプロレタリア文学が生まれた。
代表的作家：小林多喜二・葉山嘉樹

プロレタリア文学

47. 小林多喜二『蟹工船・党生活者』(新潮文庫)

海軍の保護のもとオホーツク海で操業する蟹工船は、乗員たちに過酷な労働を強いて暴利を貪っていた。『国策』の名によってすべての人権を剥奪された未組織労働者のストライキを扱い、帝国主義日本の一断面を抉る「蟹工船」。近代的軍需工場の計画的な争議を、地下生活者としての体験を通して描いた「党生活者」。29歳の若さで虐殺された著者の、日本プロレタリア文学を代表する名作2編。



48. 横光利一『機械・春は馬車に乗って』(新潮文庫)

ネームプレート工場の四人の男の心理が馬車のように絡み合いつつ、一つの詩的宇宙を形成する「機械」等、新感覺派の旗手の傑作集。



50. 川端康成『雪国』(新潮文庫)

親譲りの財産で、さまざまな生活を送る島村は、雪深い温泉町で芸者駒子と出会い。許婚者の療養費を作るため芸者になったといい、駒子の一途な生き方に惹かれてからも、島村はぬきぎりの愛以上のつながりを持つとうしない——。冷たいほどにすんだ島村の心の鏡に映される駒子の烈しい情熱を、哀しくも美しく描く。ノーベル賞作家の美質が、完全な開花を見せた不朽の名作。



85. 三島由紀夫『金閣寺』(新潮文庫)

一九五〇年七月一日、「国宝・金閣寺焼失。放火犯は寺の青年僧」という衝撃的ニュースが世人の耳目を驚かせた。この事件の陰に潜められた若い学僧の悩み——ハンディを背負った宿命の子の、生への消しがたい思いと、それゆえにも金閣の美の魔力に魂を奪われ、ついには幻想と心中するにいたった悲劇……。31歳の鬼才三島が全青春の決算として告白体の名文に綴った不朽の金字塔。



87. 三島由紀夫『潮騒』(新潮文庫)

文明から孤絶した、海青い南の小島——潮騒と磯の香りと明るい太陽の下に、海神の恩寵あつし若くたくましい漁夫と、美しい乙女が奏でる清純で官能的な恋の牧歌。人間生活と自然の神秘的な美と完全な一登をともえていた古代ギリシアの人間像に対する憧れが、著者を新たな冒険へと駆り立て、裸の肉体と肉体がぶつかり合う端整な美しさに輝く名作が生れた。



89. 井上靖『あすなろ物語』(新潮文庫)

天城山麓の小さな村で、血のつながりのない祖母と二人、土蔵で暮らした少年・貞太。北国の高校で青春時代を過ごした彼が、長い大学生活を経て新聞記者となり、やがて終戦を迎えるまでの道程を、六人の女性との交流を軸に描く。明日は槍になろうと願いながら、永遠になりえない「あすなろ」の木の説話に託し、何者かになろうと夢を見、もがく人間の運命を活写した作者の自伝的小説。



91. 遠藤周作『沈黙』(新潮文庫)

島原の乱が鎮圧されて間もないころ、キリスト教の厳しい日本に潜入したボルトガル人司祭ロドリゴは、日本人信徒たちに加えられる残忍な拷問と悲惨な殉教のうめき声に接して苦悩し、ついに背教の淵に立たされる。神の存在、背教的心理、西洋と日本の思想的断絶など、キリスト信仰の根源的な問題を鋭く、「神の沈黙」という永遠の主題に切実な問いを投げかける長編。



93. 大江健三郎『死者の香り・飼育』(新潮文庫)

屍体処理室の水槽に浮き沈みする死骸群に託した屈折ある抒情。「死者の香り」、療養所の厚い壁に閉じこめられた脊椎カリエスの少年たちの哀歌、「他人の足」、黒人兵と寒村の子供たちとの無残な悲劇「飼育」、バスの車中で発生した外国兵の虐行を傍観してしまう屈辱の味を描く「人間の羊」など6編を収める。学生時代に文壇にデビューしたノーベル賞作家の輝かしい芥川賞受賞作品集。



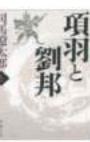
95. 開高健『パニック・裸の王様』(新潮文庫)

とつじょ大繁殖して野に街にあふれたネズミの大群がまき起す大恐慌を描く「パニック」。打算と偽善と虚栄に満ちた社会でほとんど生殺されかかっている幼い生命の救出を描く芥川賞受賞作「裸の王様」。ほかに「巨人と玩具」「流亡記」。工業社会において人間の自律性をすべて咬み砕きつつ進む巨大なメカニズムが内蔵する物理的エネルギーのものすごさを、恐れと驚嘆と感動とで語る。



97. 三浦哲郎『忍ぶ川』(新潮文庫)

貧弱の中に結ばれた夫婦の愛を高らかにうたって芥川賞受賞の表題作ほか「初夜」「帰郷」「団欒」「恥の譜」「幻燈画集」「驢馬」を収める。



99. 司馬遼太郎『項羽と劉邦』(新潮文庫)

紀元前3世紀末、秦の始皇帝は中国史上初の統一帝国を創出した戦国時代に終止符をうつた。しかし彼の死後、秦の統制力は弱まり、陳勝・吳広の一揆がおこると、天下は再び大乱の時代に入る。——これは、油のごとき起き上がりの劉邦が、楚の猛将・項羽と天下を争って、百敗しつつもついに楚を破り漢帝国を樹立するまでをとおし、天下を制する「人望」とは何かをきわめつくした物語である。



101. 井上ひさし『ナイン』(講談社文庫)

懐しい町の匂いを求めて、私はときどき駅を降りてみる。四谷しんみち通り、20年前の野球少年たちはどうしているだろう。ぶーんと木の香をさせていた職人のおじさんは元気にしているだろうか。バスの窓から見る風景も、躊躇の内で垣間見せるドラマも、東京の町はすべて通りすがりの私の胸に熱く迫ってくる。



103. 有吉佐和子『恍惚の人』(新潮文庫)

老いて生きすることは幸福か？ 日本の老人福祉政策はこれでよいのか？ 誰もが迎える「老い」を直視し、様々な問題を投げかける。



105. 壺井栄『二四の瞳』(角川文庫)

昭和のはじめ、瀬戸内海べりの一寒村の小学校に赴任したばかりの大石先生と、個性豊かな12人の教え子たちによる、人情味あふれる物語。分教場でのふれあいを通じて絆を深めていった新米教師と子どもたちだったが、戦争の渦に巻き込まれながら、彼らの運命は大きく変えられてしまう。戦争がもたらす不幸と悲劇、そして貧しい者がいつも磨かれてることに対する厳しい怒りを訴えた不朽の名作。



86. 三島由紀夫『豊饒の海』(新潮文庫)

維新の功臣を祖父にもつ侯爵家の若き嫡子松枝清顕と、伯爵家の美貌の令嬢綾倉聰子のついに結ばれることのない恋。玲り高い青年が、「禁じられた恋」に生命を賭して求めたものは何であったか？——大正初期の貴族社会を舞台に、破滅へと運命づけられた悲劇的な愛を優雅絢爛たる筆に描く。現世の営為を越えた混沌に誘われて展開する夢と転生の壯麗な物語。



88. 井上靖『天平の甍』(新潮文庫)

文明から孤絶した、海青い南の小島——潮騒と磯の香りと明るい太陽の下に、海神の恩寵あつし若くたくましい漁夫と、美しい乙女が奏でる清純で官能的な恋の牧歌。人間生活と自然の神秘的な美と完全な一登をともえていた古代ギリシア的人間像に対する憧れが、著者を新たな冒険へと駆り立て、裸の肉体と肉体がぶつかり合う端整な美しさに輝く名作が生れた。



90. 安岡章太郎『海辺の光景』(新潮文庫)

不思議なほど父を嫌っていた母は、死の床で「おとうさん」とかすれかかる声で云った——。精神を病み、海辺の病院に一年前から入院している母、信太郎は父と見舞う。医者や看護人の対応にとまどいながら、息詰まる病室で九日間を過ごす。戦後の窮屈生活における思い出と母の死を、虚無的な心象風景に重ね合わせ、戦後最高の文学的達成といわれる表題作ほか全七編の小説集。



92. 遠藤周作『海と毒薬』(新潮文庫)

戦争末期の恐るべき出来事——九州の大学付属病院における米軍捕虜の生体解剖事件を小説化。著者の念頭から絶えて離れることのない問い「日本人とはいかなる人間か」を追究する。解剖に参加した者は単なる異常者だったのか？ どんな倫理的真実がこのような残酷行為に駆り立てたのか？ 神なき日本人の「罪の意識」の不在の無気味さを描き、今なお背筋を凍らせる問題作。



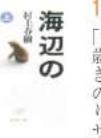
94. 大江健三郎『万延元年のフットボール』(講談社文芸文庫)

友人の死に導かれ夜明けの穴にうずくまる僕。地獄を所有し、安保闘争で傷つけた鷹四。障害児を出産した業界。苦渋に満ちた登場人物たちが、四国の谷間の村をさして軽快にに出発した。万延元年の村の一揆をなぞるように、神話の森に暴動が起る。幕末から現代につなぐ民衆の心をみごとに形象化し、戦後世代の切実な体験と祈求を結実させた表題作など初期作品5編。



96. 北杜夫『夜と霧の隅で』(新潮文庫)

ナチスの指令に抵抗して、患者を救うために苦悩する精神科医たちを描き、極限状況下の人間の不安を捉えた表題作など初期作品5編。



98. 三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』(新潮文庫)

東京育ちの少年・勇太は、父を事故で亡くし、母に連れられ東北の山あいにある湯ノ花村に移ってきた。村の子供たちになかなか馴染めず退屈な毎日を送っていたが、ひょんなことから不思議な座敷わらじと出会った。彼らとの交友のなかで、いつか勇太はまたましい少年へと成長していく——みちのくの風土と歴史への深い思いがユーモアに包まれ、詩的名文に結晶したメンヘン。



100. 司馬遼太郎『坂の上の雲』(文春文庫)

松山出身の歌人正岡子規と軍人の秋山好古・真之兄弟の三人を軸に、維新から日露戦争の勝利に至る明治日本を描く大河小説。



102. 井上ひさし『ブンとフン』(新潮文庫)

フン先生が書いた小説の主人公、神出鬼没の大泥棒ブンが小説から飛び出した。奔放な空想奇想が痛烈な諷刺と嘲笑を生む処女長編。



104. 有吉佐和子『華岡青洲の妻』(新潮文庫)

世界最初の全身麻酔による乳癌手術に成功し、漢方から蘭医学への過渡期に新時代を開いた紀州の外科医華岡青洲。その不朽の業績の陰には、麻酔剤「通仙散」を完成させるために進んで自らを人体実験に捧げた妻と母があった——美談の裏にくりひろげられる、青洲の愛を争う二人の女の激越な葛藤を、封建社会における「家」と女とのつながりの中で浮彫りにした女流文学賞受賞の力作。



106. 山崎豊子『沈まぬ太陽』(新潮文庫)

広大なアフリカのサバンナで、巨象に狙いをさだめ、獵銃を構える一人の男がいた。恩地元、日本を代表する企業・国民航空社員。エリートとして将来を嘱望されながら、中東東からアフリカへと、内規を無視した「流刑」に耐える日々は十年に及ぼしていた。人命をあずかる企業の非情、その不条理に不屈の闘いを挑んだ男の運命——。人間の真実を問う壮大なドラマが、いま幕を開ける！



107. 林芙美子『放浪記』(新潮文庫)

貧困にあえぎながらも、向上心を失わず強く生きる一人の女性——日記風に書きとめた雑記帳をもとに構成した、著者の若き日の自伝。



109. 幸田文『台所のおと』(講談社文庫)

女はそれぞれ音をもってるので、いいか、角だつな。さわやかでおとなしいのがおまえの音だ。料理人の佐吉は病床で聞く妻の草子の音が微妙に変わったことに気付く……音に絡み合う女と男の心の繋がりを小気味よく描く表題作。夫「雪もち」「食欲」「祝辞」など10編。五感を鋭く研ぎ澄ませた感性が紡ぎ出す幸田文の世界。



111. 向田邦子『父の詫び状』(文春文庫)

度鳴る父、威張る父、殴る父、そして陰でやさしい心遣いをする父、誰でも思い当たる父親のいる情景を爽やかなユーモアを交えて描き、名人真打ちと絶賛された著者の第一エッセイ集。



113. 三浦綾子『氷点』(角川文庫)

辻口病院長夫人・夏枝が青年医師・村井と逢い引きしている間に、3歳の娘リリ子は殺害された。「汝の敵を愛せよ」という聖書の教えと妻への復讐心から、辻口は極秘に犯人の娘・陽子を養子に迎える。誰も知らない夏枝と長男・徹に愛され、すぐさま育つ陽子。やがて、辻口の行いに気づくことになった夏枝は、激しい憎しみと苦しさから、陽子の喉に手をかけた。愛と罪と教しをテーマにした著者の代表作であるロングセラー。



115. 宮本輝『青が散る』(文春文庫)

燎平は、新設大学の一期生として、テニス部の創立に参加する。炎天下でのコートづくり、部員同士の友情と敵意、勝利への貪欲な欲望と「王道」と、そして夏子との運命的な出会い。青春の光あふれる鮮やかさ、荒々しいほどの野心、そして戸惑いと切なさを、白球を追う若者たちの群像に描いた宮本輝の代表作。



117. 村上春樹『海辺のカフカ』(新潮文庫)

「君はこれから世界でいちばんタフな15歳の少年になる」——15歳の誕生日がやってきたとき、僕は家を出でる街に行き、小さな図書館の片隅で暮らすようになった。家を出るときに父の書斎から持ちだしたのは、現金だけじゃない。古いライター、折り畳み式のナイフ、ポケット・ライト、濃いスカイブルーのレザーベルト、小さいころの姉と僕が二人並んでうつった写真……。



119. 山田詠美『ぼくは勉強ができない』(新潮文庫)

ぼくは確かに成績が悪いよ。でも、勉強よりも素敵で大切なことがいっぱいあると思うんだ——。17歳の時田秀美くんは、サッカー好きの高校生。勉強はできないが、女性にはよくもてる。ショットバーで働く年上の桃子さんと熱愛中だ。母親と祖父は秀美に理解があるけれど、学校はどこか居心地が悪い。この窮屈さはいったい何なんだ！ 凜々しくてクールな秀美くんが時には悩みつつ活躍する高校生小説。



121. よしもとばなな『キッチン』(角川文庫)

唯一の肉親であった祖母を亡くし、祖母と仲の良かった雄一とその母（実は父親）の家に同居することになったみかげ。日々の暮らしの中、何気ない二人の優しさに彼女は孤独な心を和ませていくのだが…。



123. 江國香織『きらきらひかる』(新潮文庫)

私たちは十日前に結婚した。しかし、私たちの結婚について説明するのは、おそらくやっかいである——。笑子はアル中、睦月はホモでも恋人あり。そんな二人はすべてを許して結婚した、はずだったのだが……。セックスレスの奇妙な夫婦関係から浮かび上がる誠実、友情、そして恋愛とは？ 傷つき傷つけながらも、愛することを止められないすべての人に贈る、純度100%の恋愛小説。



125. 川上弘美『センセイの鞄』(文春文庫)

ひとり通いの居酒屋で37歳のツキコさんがたまさか隣あったご老体は、学生時代の国語の恩師だった。カウンターでぱつぱつと交わす世間話から始まったセンセイとの日々は、露店めぐりやお花見、ときにはささいな喧嘩もはさみながら、ゆたかに四季をめぐる。



イギリス

129. ディケンズ「クリスマス・キャロル」(新潮文庫)



ケチで冷酷で人間嫌いのがりがり亡者スクリュージ老人は、クリスマス・イブの夜、相棒だった老マーレイの亡靈と対面し、翌日からは彼の予言どおりに第一、第二、第三の幽霊に伴われて知人の家を訪問する。炉辺でクリスマスを祝う、貧しいけれど心暖かい人々や、自分の将来の姿を見せられて、さすがのスクリュージも心を入れかえた……。文豪が贈る愛と感動のクリスマス・プレゼント。

131. モーム『月と六ペンス』(新潮文庫)



あるパーティで出会った、冴えない男ストリックランド。ロンドンで、仕事、家庭と何不自由ない暮らしづを送っていた彼がある日、忽然と行方をくらませたという。パリで再会した彼の口から真相を聞いたとき、私は耳を疑った。四十をすぎた男が、すべてを捨てて挑んだことは——。ある天才画家の情熱の生涯を描き、正気と狂気が混在する人間の本質に迫る、歴史的大ベストセラーの新訳。

ドイツ

132. ヘッセ『知と愛』(新潮文庫)



修道院に入った美少年ゴルトムントは、若く美しい師ナルチスの存在によって、自分は精神よりもむしろ芸術に奉仕すべき人間であることを教えられ、知を断念して愛に生きるべく、放浪の生活にはいる——。二つの最も人間的な欲求である知と愛とが、反撥し合いながら互いに引かれ合う姿を描いた多彩な恋愛変奏曲。

134. カフカ『変身』(新潮文庫)



ある朝、気がかりな夢から目をさますと、自分が一匹の巨大な虫に変わっているのを発見する男グレゴル・ザムザ。なぜ、こんな異常な事態になってしまったのか……。謎は完明されぬまま、ふだんと変わらない、ありふれた日常がすぐしていく。事実のみを冷静に伝える、まるでレポートのような文体が読者に与えた衝撃は、様ざまな解釈を呼び起した。

フランス

136. エゴー『レ・ミゼラブル』(新潮文庫)



わずか一片のパンを盗んだために、19年間の監獄生活を送ることになった男、ジャン・ヴァルジャンの生涯。19世紀前半、革命と政変で動揺するフランス社会と民衆の生活を背景に、キリスト教的な真実の愛を描いた叙事詩的な大長編小説。

138. サン・テグジュベリ『夜間飛行』(新潮文庫)



『夜間飛行』は、郵便飛行事業がまだ危険視されていた時代に、事業の死活を賭けて夜間飛行に従事する人々、人間の尊厳と高邁な勇気に満ちた行動を描く。

140. サガン『悲しみよ、こんにちは』(新潮文庫)



セシルはもうすぐ18歳。ブレイボーアイ肌の父レイモン、その恋人エルザと、南仏の海辺の別荘でヴァカンスを過ごすことになる。そこで大学生のシリルとの恋も芽生えるが、父のもうひとりのガールフレンドであるアンヌが合流。父が彼女との再婚に走りはじめたことを察知したセシルは、葛藤の末にある計画を思い立つ……。

ロシア

142. ドストエフスキイ『カラマーゾフの兄弟』(光文社古典新訳文庫)



父親ヨードル・カラマーゾフは、圧倒的に粗野で精力的、好色きわまりない男だ。ミーチャ、イワン、アリョーシャの3人兄弟が家に戻り、その父親とともに妖艶な美人をめぐって繰り広げる葛藤。アリョーシャは、慈愛あふれるゾシマ長老に救いを求めるが……。

アメリカ

145.J.D.サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』(白水社ブックス)



インチキ野郎は大嫌い！　おとなの儀礼的な処世術やまやかに反発し、虚栄と悪の華に飾られた巨大な人工都市ニューヨークの街を、たったひとりでさまよいつける16歳の少年の目に映じたものは何か？　病める高度文明社会への辛辣な批判を秘めて若い世代の共感を呼ぶ永遠のベストセラー。

147. リチャード・バック『かもめのジョナサン』(新潮文庫)



「飛ぶ歓び」「生きる歓び」を追い求め、自分の限界を突破しようとした、かもめのジョナサン。群れから追放された彼は、精神世界の重要さに気づき、見出した眞実を仲間に伝える。しかし、ジョナサンが姿を消した後、残された弟子のかもめたちは、彼の神格化を始め、教えは形骸化していく……。新たに加えられた奇跡の最終章。帰ってきた伝説のかもめが自由への扉を開き、あなたを変える！

149. ヘミングウェイ『日はまた昇る』(新潮文庫)



禁酒法時代のアメリカを去り、男たちはパリで“きょうだけ”を生きていた——。戦傷で性行為不能となったジェイクは、新進作家たちや奔放な女友たちのプレットとともに灼熱のスペインへと繰り出す。祝祭に沸くパンプローナ。濃密な情熱と血のにおいに包まれて、男たちと女は虚無感に抗いながら、新たな享楽を求めつづける……。

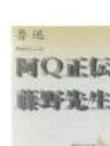
中国

148. ヘミングウェイ『老人と海』(光文社古典新訳文庫)



数ヵ月続く不漁のために周囲から同情の視線を向けられながら、独りで舟を出し、獲物がかかるのを待つ老サンチャゴ。やがて巨大なカジキが仕掛けに食らいつき、三日にわたる壮絶な闘いが始まる……。決して屈服しない男の力強い姿と哀愁を描く、ヘミングウェイ文学の最高傑作。

150. 魯迅『阿Q正伝・藤野先生』(講談社文芸文庫)



“人が人を食う”ことを恐怖する主人公の「子供を救え」の叫びと共に封建制度・儒教道德の暗黒を描く「狂人日記」。革命のどさくさの中の阿Qの死と悲喜劇を通して“革命と民衆”を鋭くつく「阿Q正伝」。「孔乙己」「酒樓にて」等。辛亥革命前後の混乱期に敢然とベンを執つて立ち上がり、中国近代文学を切り拓いた魯迅が、時代の苦悩と不屈の精神を伝える13篇。魯迅を読まずして中国を知ることはできない。

※本の紹介文は、書誌データを引用した。

Knowledge for Growth Research Book

2018年4月発行

発行：京都学園中学校高等学校 図書館

〒616-8036

京都市右京区花園寺ノ中町8

Tel075 (461) 5105